

藤縄謙三著

## 『歴史の父ヘロドトス』

仲手川良雄

著者藤縄氏はここ数年の間に『歴史学の起源——ギリシア人と歴史——』と『ギリシア文化の創造者たち——社会史的考察——』とを相ついで公けにしており、その活動の旺盛さが注目されたが、このたびの大著はまずその量によって人を驚嘆させるものがある。A5版二段組みで五百数十頁は日本の西洋史研究者が一人の歴史家の研究に捧げた著作として、おそらく最大のものかもしれない。しかも前二著が既発表論文に新稿を加えたものであったのに対し、これは全巻書き下ろし新稿である。著者は「あとがき」で、「自分の研究者としての生涯の最も充実した時期の十五年間を、主として本書一冊のために費してしまった」とのべている。その意味で本書は名実ともに、ギリシア史研究にこれまでの生涯を捧げてきた著者の主著というべきものであろう。限られた紙数の中でこの大著の内容を伝え、かつ評することは筆者の能力を超える仕事であり、不足の点は多々あろうが、まず本書の概要の紹介から始めよう。

第一部「総説——ヘロドトスの諸相」は、ヘロドトスが著作の

冒頭においた序文の考察から始まる。この序文はかれのヒストリエーの目的とテーマを宣明したものであるが、まずこの短い文章の中に含まれる複雑な問題が注意深くとりだされる。著者はここにまず、自発的に研究に志し、過去の大事件の原因を究明し、かつ驚嘆の念をもってそれを記述しようとする史家の態度を認める。他方序文は著作の主題についてはそれほど明確にのべていないが、それは人間の行為一般に係わる人類学的研究、とくに偉大なる行為に関する歴史学的文化史的研究、さらに（おもにペルシア）戦争史であるとする。この序文におけるヘロドトスの態度と主題の捉え方の中に、藤縄氏自身の著作の方向と特徴が示されているように思われる。序文について、ヘロドトスはペルシア人の説として、ペルシア戦争はアジア人とヨーロッパ人との間における相互の女性掠奪と、それに対する報復によって生じた争いの延長線上におこった戦争であるという話を掲げているが、著者はこの伝承から、相互の報復こそ戦争の根本原因だとするヘロドトスの基本的見方と、東西における女性観の違いとを読みとっている。この辺まではゆっくりとした筆運びだが、以下「クロイソス物語」「ペルシア大王」「隸属か自由か」の各章では、リュディア王国史からペルシア史をへてイオニア反乱までの長い歴史が扱われている。ここは地域的には小アジア西部からイラン高原までを含み、第二部でも地理的民族学的視点から再度とり上げられるが、ここでは歴史とロゴイ（独立的物語）に焦点を合わせて考察されている。著者はヘロドトスの記述に則して筆を進めながら、史実についてはバビロニアのナボニドス王の年代記、ダレイオス大王の『業績表』あるいはパッキュリデスの祝勝歌等々の

他の史料を引いて、史家の記述を検討する一方、ロゴイについては事実性よりも、解釈によってそこに含まれる意味をとりだそうとする。リュディアの最後の王クロイソスの栄華と没落、その後ペルシア王に仕えて警告者に転身したかれの生涯はそれ自体ヘロドトスの著作の根本思想を暗示するようなロゴイを含んでいるが、さらにこの三章にはクロイソスとソロンとの対話、ディオケスの専制権力獲得の物語、政体論争などの興味あるロゴイが含まれている。その末部に、著者が考えるギリシア人の特質を列挙したあと、残る二章ではシュトラースブルガー以来明らかにされたヘロドトスの年代学と、ヒストリエーのための旅行と地理学とが扱われている。

第二部「異民族の世界」ではアジア、エジプト、リビア、スキュティア、トラキア、マケドニアの諸地域について、ヘロドトスの記した地形、地誌、民族学、歴史、挿話などが考察されている。この場合著者の基本的方法はヘロドトスの足跡を辿ることであり、これら各地域について史家が実際にどこまで、どのようにしているのかを推定しようとしている。たとえばメソポタミアにはおそらくシリア北部のボンデイオンから入り、バビロンまでいったが、そこで引き返したのではないか、あるいはエジプトには海路と陸路と両方から着いたらしい。トラキアではその海岸を船で通り、サモトラケとタソスの両島に上陸し、そこを基地としてトラキアを調査したようだ等々を、ヘロドトスの記述と当時の諸状況とから推測してゆく。足跡を追いながらヘロドトスの見聞がパノラマ風に展開されることによって、旅行者ヘロドトスを追体験させるような面がある。もちろん同時に著者の方法は学問的であり、

できる限り史家の記述を検証しようとしており、ヘロドトスの情報源についても可能なかぎり明らかにし、あるいは推定しようとしている。たとえばダレイオスが遣した属州についての国名や民族名だけを記した碑文と、ヘロドトスの同じ属州についての納税まで記した記事とを比較したり、あるいはペルシア支配下の多様な民族の総覧ともいうべきクセルクセスの遠征軍の描写から判断したりして、ヘロドトスはかなり上層に属する複数のペルシア人から情報を得ていたらしいと考える。著者はヘロドトスの記述をなるべく知的批判的に考察しようとするが、同時にヘロドトスの足跡追求の根源には、この史家がエジプト系ヘラクレス神について正確な知識を得ようとしてフェニキアのテュロスまで航海したとか、同じように宗教的伝えを比較検討するために、わざわざエジプトの三都市まで足を運んだとかいう、ヘロドトスの強烈な探求欲に対する共感が、まずあるように思われる。

第三部「ギリシア世界」。第二部のトラキア、マケドニアはクセルクセスの遠征路と関連づけつつ記述されたが、ついでここでは当然の道筋としてギリシア世界に入っている。まず「ギリシア民族の成立と分布」の章で、著者がヘロドトスの記述のうちとくに注目するのは、イオニア人もアイオリス人も元来はペラスゴイと呼ばれていたという点で、それによるとイオニアの「代表」であるアテナイ人もとはペラスゴイ、したがってバルバロイであったことになる。このヘロドトスの独自の説は今日一般に斥けられているとしながら、著者はそこに、異民族の混在したヘロドトスの故国ハリカルナッソスの状態を絡めて、ヘレネスとバルバロイとを差別的にみようとしないヘロドトスの人種観の真実を読み

とうとうとしている。ついで「アテナイ史」では初期の歴史からマラトンの戦いまでがヘロドトスの記述に則して辿られるが、マラトンの戦いについて以外はおおむね簡略である。つづく「ギリシア連合軍の抗戦」の章ではアルテミシオンの海戦、サラミスの海戦、プラタイアの合戦、ミューカレ岬の戦いが、さらに次章では「スパルタ史」がヘロドトスの記述によりつつ、それにコメントを付する形で記述されている。著者はヘロドトスがアテナイとアルクメオニダイ家とに好意的であるとする見方に与しておる。またヘロドトスがデロス同盟についてはその発端にかんたんに言及するのみで、同盟の現実とアテナイ帝国主義とを充分体験している筈なのに、それについては黙殺していることに注意を喚起している。

第四部「ヘロドトスの生涯と環境」。史料も研究も多い「ギリシア世界」についてよりも、そのいずれも少なく、その分著者が独自に組上げることが求められるこの部分において、著者の筆は生氣をとり戻したように思える。はじめの二章「伝記史料について」と「故郷ハリカルナッソス」とで注目すべき点は、前者では『スウダ辞典』に記されたヘロドトスの家系の人名の考察から、かれの中にカリア人の血が混じっているとされていること、後者ではハリカルナッソスがドーリス系のポリスとされながらも、カリアの要素を多く保存している特異なポリスであるとしていることである。つまり著者は、ヘロドトスは血においても、故郷のポリスにおいてもヘレネスとバルバロイとを共有していたことに注意を喚起する。つぎのヘロドトスの「サモスへの亡命」は『スウダ辞典』にも記されているが、著者は史家がここにかなり長期に滞在していたとみる。ヘロドトスがサモスにおいてはじめて興味を

もったのは、ペルシア戦争のことなどではなく、その大工事であり、ついでそれらをつくったポリュクラテスという人物とかれをめぐる諸事件であったという指摘、さらにサモスの歴史はペルシア戦争史の縮図であり、かれはここで歴史をみる眼を養ったという指摘は注目される。「亡命と旅行」の章では、ヘロドトスの宗教を「漂泊者の宗教」とみる点、「アテナイ滞在」の章では、ヘロドトスはトゥリオイの植民に参加したあと、アテナイに戻り、ペロポネソス戦争初期の疫病による混乱の中で死んだのではないかという推定が興味をひく。

第五部「死後の生命」はヘロドトスの受容と評価の歴史である。古代ギリシア、共和政ローマ（その代表としてのキケロ）、ローマ帝政期からビザンツをへてルネサンス期、そして今日にいたるまでの西欧の古典学者、歴史家、思想家、文学者たちの間におけるヘロドトスの痕跡が丹念に探索され、さらには日本への伝来、司馬遷との比較、日本に伝えられたと思われるロゴイまで扱われている。それはヘロドトスという存在に対する反応という形で示された西洋史学史、あるいは西洋思想史の趣を呈している。およそ一九三〇年ごろから始まるヘロドトス再評価まで、かれの「死後」の歴史は今日の人間からみれば、賛否いずれもおおむね誤解の歴史とみえるであろう。しかしこのヘロドトス評価の歴史は今日われわれが歴史において失っているものを見せようとするように思われる。ヘロドトスはいかに嘘つきといわれようと、きびしい時の訓練を通して二千数百年生き抜いてきた。しかもその主要な原因が近年認められるようになった史学的諸価値のためではなく、ツキニディデスの場合と同じように文章の質のためであったとい

う言は、銘記されるに価しよう。

以上、大著の内容を瞥見してきたが、大筋において、本書は半世紀余り前から始まったヘロドトス再評価の線上にある業績だといえるであろう。その再評価の理由の一つは、ヘロドトスの記述を子細に検討したり、あるいは考古学的史料その他と照合したりした結果、かれの記事には従来考えられていたよりも、はるかに多くの事実的正確さが含まれていることが見出されたことである。もう一つのおもな理由は、一見さきの理由と矛盾するようにみえるが、ヘロドトスの記した逸話やロゴイにはたんなる事実の記述では捉えこめないような内面的真実が盛り込まれており、さらには史家自身信をおいていないような伝聞の記載すらも、その伝聞を育んだ人びとの歴史の中における思考・感受を示しているという見方が優勢になってきたことである。著者は諸史料との照合によって第一の点を処々で確認しているが、第二の点についても、ソロンとクロイソスとの対話の記事に因んで、歴史記述における虚構の意味を積極的に認めているし、またリビアのプシュロイ族がかれらに害をする南風を征伐するため砂漠の中に進んでいって全滅したという奇抜な話を、史家が書き留めておいてくれたことに感謝している。

著者は「あとがき」の冒頭で、「本書を書き終えて、私は長い長い旅路から疲れ果てて故郷へ辿り着いたような感じである。」と述懐しているが、この言は本書の基本的性格と密接に関連しているように思われる。かりに十九世紀後半以後盛んになった学問的歴史研究の動きに限って語るとしても、その中でおこったヘロドトス再評価という現象じたい、歴史研究者たちが長い専門的実

証研究の過程を歩んだあとで、いだくにいたった故郷回帰の願望に似たものを含んでいる。とはいえ、今日においてもこの方向はけっして支配的ではない。にもかかわらず、著者が研究者としてもっとも充実した十五年をあえてこの仕事に費したのは、そこに一つの決意があったに違いない。著者はその決意を故郷回帰として意識したが、その意識はヘロドトスの全体像の把握と不可分に結びついているように思えるのである。なぜなら故郷として身を託せる場合は、全体像の広さを必要とするからである。

ヘロドトス研究として本書の最大の特徴はそのようなヘロドトスの全体的把握を目指している点にあるといえよう。ヘロドトスについては近年夥しい量の研究文献が出ているが、そのほとんどは個別的側面からの研究であり、全体像構築を目指したものはあまり見当たらないように思われる。管見の限りであえていえば、本書よりもずっと薄く、かつ対象領域も狭いが、一九三〇年以後では、M・ポーレンツの『ヘロドトス——ヨーロッパ最初の歴史家——』（一九三七年）が一般的扱い方をしているといえるように思うが、それ以後同種の試みはあるであろうか。あるいはK・W・ウオーターズ『歴史家ヘロドトス』（一九八五年）もそれに当るかもしれない。しかしいずれも考察の範囲を歴史家としてのヘロドトスに限っている。本書のように人間、生涯、旅行家、地理学者、死後の評価の歴史までも含んでいない。藤縄氏はヘロドトスの歴史家としての業績のみではなく、その人間、行動、足跡、さらには強烈なヒストリエーの精神そのものにも関心をもっているように思われる。その意味で本書はヘロドトス研究として野心的でユニークであり、それだけに今日の専門分化した学問のあり方

を重視する人は、あるいはこれを無謀な試みとみるかもしれないが、先にのべたように、著者にはどうしても「全体」を扱わずにはおれない内的事情があったのではないかと推察される。

著者はヘロドトスの記述を手掛りにしながら、かれの足跡を辿り、その仕事の性質に光を当てることによって、「歴史」の背景にあるものを探り出そうとしているようにみえる。これも本書の特徴の一つである。歴史的事実の研究者はもちろん、史学史の研究者も、ヘロドトスの探求の成果を問題にするが、それのみでなく、藤縄氏は本書で探求の過程そのものに深い関心を寄せている。先にみたサモス島におけるヘロドトスの心的過程として、まずその有名な大工事からポリュクラテスへ、またこの僭主になつた諸事件からペルシア戦争へと史家の興味が広がったと著者が推測しているのは一例であるが、同様の歴史的心象風景やその推移への観察は多くのところでおこなわれている。ヘロドトスは僭主政を嫌いつつポリュクラテス等の大いなる僭主たちには賛辞を惜しまなかったが、この「矛盾」は、もし著者のいうサモスのヒストリエーの過程が事実ならば、容易に解消されるであらう。ヘロドトスは「歴史の父」であるとともに歴史の原点である。著者は本書においてこの原点の意味を一つひとつ具体的に闡明し、確認しようとしているかにみえる。

著者は本書において古代の証言から最新の文献までを用いてヘロドトスの記述を検証しようとしている。しかし記述を他の同時代史料と照合したり、研究文献を参照したりしながら、問題点の一つひとつ自己の見解を示している。これは対象領域の莫大な広さのゆえに容易でない仕事である。そこにヘロドトスの混血性、

ヘレネスとバルバロイとの間における女性観の相違等々の先にのべた見解をはじめ、多くの解釈が示されている。ところで全体的把握ということは全体を万遍なく扱うという意味ではない。著者は関心のままに多少恣意的に問題を選択し、自分なりの解釈をしながら、おおむね平明な文章によって、自己の全体的ヘロドトス像を描き上げている。これも特徴の一つとみてよからう。

ヘロドトスをなるべくその記述にもとづきながら自己の見方に従って全体的に解釈することは、ヘロドトス研究の今日の状況からみて至難の業であり、ある側面を専門的に研究している人の眼には行き届かないところがあるとみえるのは避けがたいであらう。どちらかというところ、ポリスを意識や思想の面からみようとしている筆者のような者には、ヘロドトスの思想の考察は不足とみえ、またソロンとクロイソスとの対話、政体論争、遠征前のクセルクセスの夢等々の研究の積まれているロゴイの解釈にも物足りなさを感ずる。いやもっと事実的問題についても、たとえば「デミストクレス決議碑文」のように、ヘロドトスの記述と相容れない記事を含み、偽作か否かをも含めて論議が多く、調べるほど断定し難く思えてくる史料を、著者がそのまま受けとっていることにも同調できない。あるいはこの碑文が関わりをもつサラミスの海戦そのものについても、いろいろな問題点がある。とくにブシュッタレイア島の攻撃について、C・W・フォーネイラはアイスキュロスとヘロドトスとの記事の不一致を指摘しており、これは少数意見と思われるが、D・W・ナイトも追隨している。もともとブシュッタレイア島がサラミス湾外のリブソクタリー島のことなのか、湾内のアヌイオス・ユエオリュイオス島のことなのか、説が

分かれており、前者だというのが多数説だが、ベロツホとN・G・M・ハモンドは後者を主張し、とくにハモンドは有力な異説を展開している。ともかくこの島がどちらであるかはベルシア艦隊の進路と船列構成がどうであったかという難問に関わっており、また主戦場がどこであったか、海戦がどう展開したかという問題とも関連している。また重ねてブシュタレイア島についていえば、ヘロドトスの記述では追放から帰ったばかりかとみられるアリスティデスが、そこでいかなる資格で重装歩兵を指揮したのかもいろいろ論じられており、そもそもかれは戦場におらず、サラミス戦におけるかれの働きについてのヘロドトスの記事はすべて捏造の受容だったのではないか、という説まである。ここに例示したような諸問題について著者はまったく触れていないが、もしヘロドトスの記事に関わるこの種の問題についても、一つひとつ検討して自己の見解を割りだしながら解釈を進めてゆくとすれば、著作は数倍の大きさを必要としよう。

人間の生命には限りがある以上、著者は多くの場合細密な論証を棄てて、全体的道筋をとったのだとみることができよう。この

ような全体的考察は著者にしてはじめてなしたものであった以上、著者の選択は間違っていないかといっているように思う。

本書は日本におけるヘロドトス研究として記念碑的業績であり、古代史学、古典学あるいは史学史に関心のある人びとにとって必読の文献として残るであろう。しかし個別的専門研究が堆く積まれている斯学の現状では、著者に倣う研究が今後現われるのは難しいかもしれない。もはや個々の論証の細密さへの関わりを断ち切れるほどの思い切りのよさはもちにくくなっているというのが実状であろう。とすれば、われわれには個別的な専門研究に没頭し、しばしば展望を見失いながら、欧米の先学の業績に追隨し依拠して説をなす以外のことを行えないのであろうか。いやわれわれにも全体への志向をもち、史学が醸成された背景への眼を養い、そしてヒストリエーの精神をつねに再生させようと努めながら、その心的雰囲気の中で、個別問題を能うかぎり徹底的に追求してゆくことは拒まれてはいないかもしれない。その雰囲気喚起する意味でも、本書は読まれるに価するのである。

(A5判 五八四頁 一九八九年六月 新潮社 四〇〇〇円)  
(早稲田大学教育学部教授)